

アジア神学セミナー
キリスト教受容のかたち
— 植村正久 —



場所: 明治学院大学
キリスト教研究所
日時: 2018年7月2日(月)
講師: 洪伊杓牧師

1.なぜ、いま、ここで
植村正久なのか

日本大学と関西学院

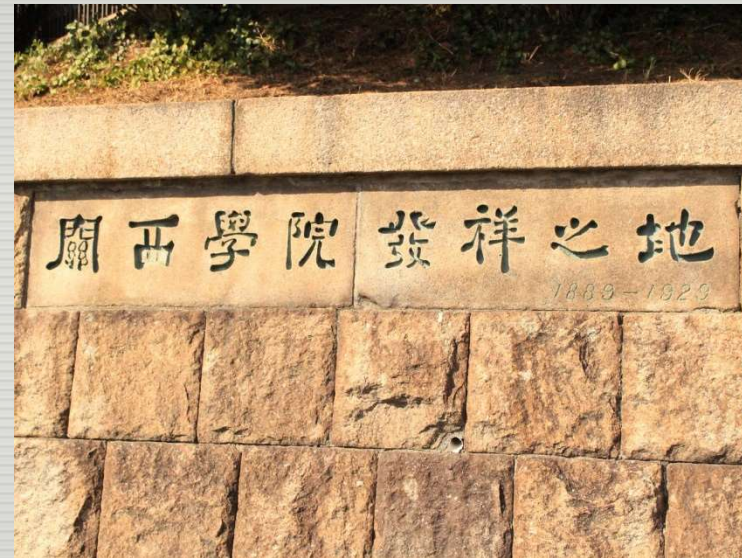


2018年5月6日、日本大学と関西学院大学のアメリカンフットボールの定期戦で選手が負傷した問題。

日本大学と関西学院



1889年米国南メソジスト教会が
神戸に創立した関西学院



1889年2月11日、明治憲法の公布をきっかけに、欧米諸国の法律だけではなく、古典的な意味合いから日本独自の法律を教える学校、また国家神道を確立するべく、皇道を広く国民に教化し、神職資格を与える養成機関として同年10月4日に設立された「皇典講究所」が母体。

日本大学と関西学院

日本精神・伝統・文化

キリスト教主義・世界市民



在学生 7万人

在学生 2万人。

明治学院は？



Do for Others!?
どのように継承すべきか？

2. 植村正久 (1858-1925) は誰か

横浜バンドの代表者



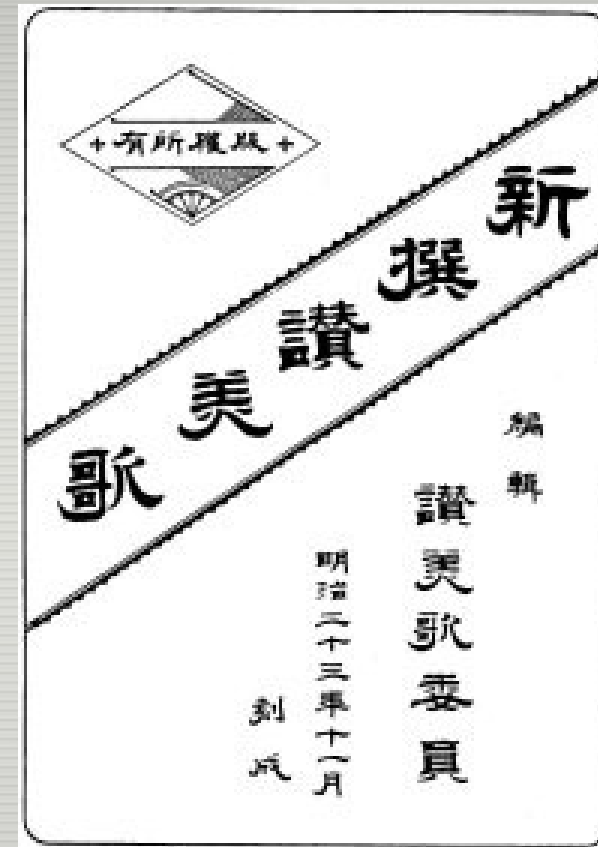
1883(明治16)年5月「日本基督教徒大親睦会」
(東京築地新栄教会会堂)

日本キリスト教界の四村



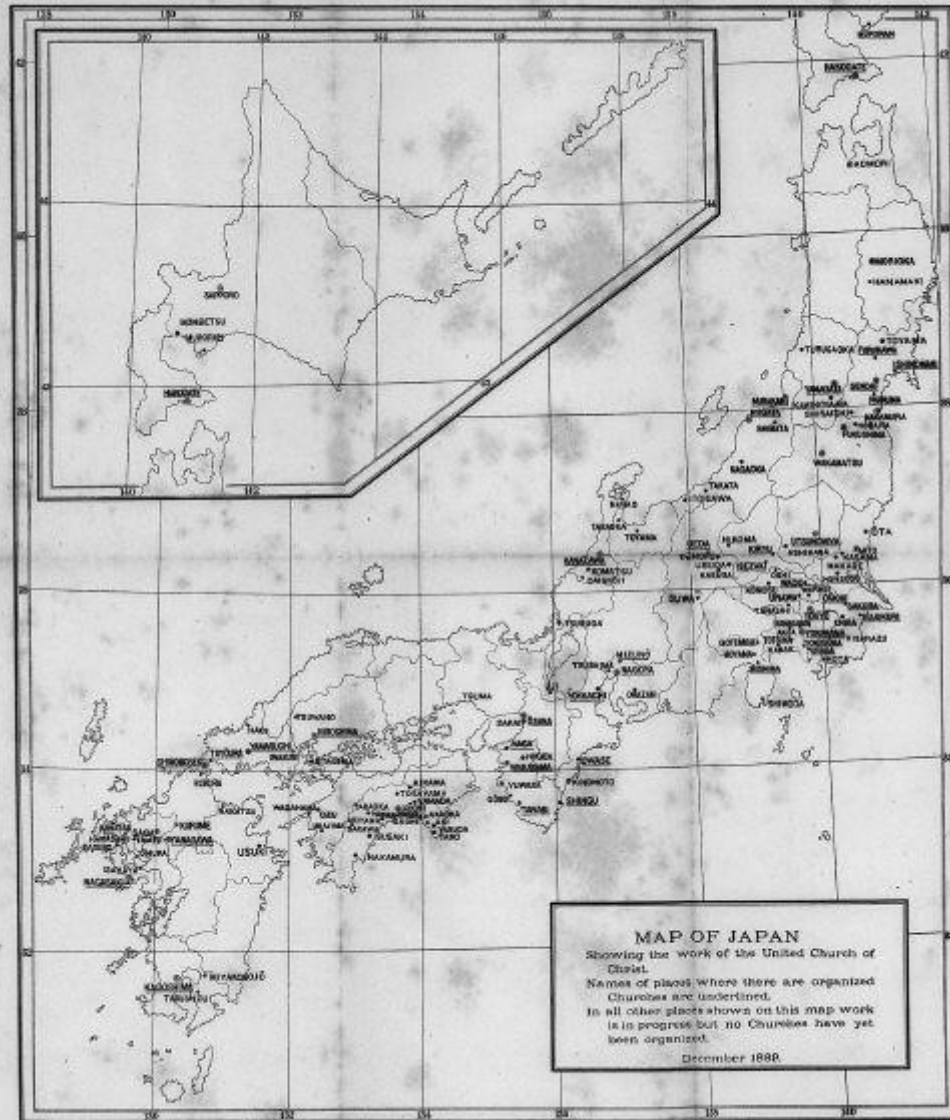
植村正久、田村直臣、松村介石、内村鑑三と共に

日本の最初の聖書翻訳と讃美歌編纂



舊約聖書の翻訳委員として参加
最初の合同賛美歌(『新選賛美歌』、1886)

エキュメニズムの具現



一致及び組合教会の合同を主導
1886-1887年には一致教会大会と組合教会総会とはそれぞれ合同を協議し、互いに使節を派遣し挨拶を行った。

(写真・日本基督一致教会の日本地図)



大航海時代
キリスト教の
アジア伝来



〇〇〇としての植村正久

1. 近代人
2. 日本人
3. キリスト者



『東京朝日新聞』(大正14年1月10日)

1. 近代人
(欧米)

2. 日本人
(伝統)

キリスト者として、
どのように
この二つを
内面化したのか

キリスト教弁証・日本のキリスト教化
の課題

植村正久への評価

「植村正久は近代日本におけるプロテスタント教会形成の重要な**中心人物**であり、福音主義の信仰を明らかにかけた旗頭的存在であった」(武田、2001、9頁)



植村正久への評価

「彼の『戦いの神学』はほかならぬ『戦いの教会』にその座を据えているのであり、そして彼の『戦いの教会』は一方では日本の異教社会に在りながら、他の一方では将来の日本のキリスト教会が欧米諸教会の『出店』に終わらず、世界教会史における自己形成の道を開拓するために、その時勢に対処するうえで触発し促進された必然的な路線である。ここに植村正久の神学的な戦いは教派的論争神学に赴かず、また単なる伝道者牧師の教育手段をもって満足せず、あくまで『真理』そのものを問題としながらいつまでも異教相手の護教論に跼蹐することなく、その一生を通じて変わらず終焉の日まで衰弱を示さなかった彼の好学精神をいよいよ『真理への愛』へと導いたであろう。」(熊野、1966、232 頁)

3.キリスト教弁証家としての 植村正久

『真理一斑』を中心に

植村正久の『真理一斑』(1884)



「植村正久が、近代日本のキリスト教が直面した二つのフロント(西欧・日本伝統)において、主体的に応戦して出版した主著『真理一斑』(1884)

『真理一斑』は、植村自身の処女作であるだけでなく、日本における「宗教哲学の先駆」(石田、1993、10頁)というべき書物であり——清沢満之の『宗教哲学骸骨』(1886)や姉崎正治の『宗教学概論』(1903)にも先立つ——。

植村正久の『真理一斑』(1884)

第一章「宗教を総説す その一」

第二章「宗教を総説す その二」

第三章「宗教の真理を論究するに必要なる精神を論ず」

第四章「神の存在を論ず その一」

第五章「神の存在を論ず その二」

第六章「神と人間との関係を論じ併せて祈祷の理を説く」

第七章「人の霊性無究なるを論ず」

第八章「イエス・キリストを論ず」

第九章「宗教学術の関係を論ず」

植村正久の『真理一斑』(1884)

- ➡ 宗教とは何か、なぜ宗教なのか、を論じる最初の二つの章と、神の存在をめぐる第四、第五章、そして結論とも言える第八章が本書の中心
- ➡ 宗教一般からキリスト教へと議論を展開(第八章と第九章)するという植村の意図は明瞭
- ➡ この書における植村の出発点は、「人間は本性的に宗教的である」(10頁)という命題

植村正久の『真理一斑』(1884)

「無限者にあらざれば、わが心の望み遂ぐるに足らざるなり。この無限なるものとは何ぞや。この絶対なるもの、いずれの所に在るや」(18頁)

➡ 植村は、有限な人間存在に無限への問いが内在していることを論じる

「人類の良心及び罪悪の観念は宗教を生起するにおいて、大いに力ありしものなりと論ず」(20頁)、「万物の原因を探るを本色とする宗教の起これる一原因なり」、「宇宙の原因論に直進して止まず」(21頁)

➡ 植村が注目するのは、宇宙の起源・原因と人間の良心という二つの問い。

『真理一斑』の神存在証明・無神論批判

「天下神なしと言うほど難きこと有らざるなり」(51)

「無神論を唱うること有神論に比ぶれば、更に困難なるものありと言わざるを得ず」(53)

「神の存在を証せんには、僅かに宇宙の一小局部にてもその証拠とすべきものあらば足れり。しかれども純然たる無神論を左証せんと欲せば、その際涯を究めがたき宇宙をことごとく究察せざるべからず。」(52-53)



無神論が論理的に困難であることを指摘。
その後、神と人間の関係論を展開。

『真理一斑』のキリスト論

「第一 キリストの過誤罪悪無きを弁じ、その聖徳実に至れるを明らかにす。」(150)

「第二 キリストの聖徳は、完全美備、普く万世万国に通じて、吾人の標章模楷となすべきものなるを論ず。」(155)

「第三 キリストの品性は衆美を兼ね、衆徳に具有して、過不及の跡を見るべからず。」(156)

「第四 キリストの常に自ら覚知し居りたることは、最も驚くべき事実なり。」(158)

「第五 イエス・キリストは多くの酸苦に遭いて、ついに十字架に釘せられたるを論ず。」(159)

➡ 議論が、キリスト教信仰へ到達し、宗教一般からキリスト教へという弁証論のプロセスは完結を迎える。

海老名弾正との「キリスト論」論争

植村のキリスト論は、**聖書テキストに基づくキリスト理解**（聖書のキリスト像）として展開される。

➡ 植村は後に、新神学問題や**海老名弾正との論争**では、伝統的教義的な聖書解釈とそれに基づくキリスト理解を主張。

植村は聖書のキリスト像を論じる中で、**進化論**の問題にも言及

➡ **人類の宗教的問い（預言）**に対する預言の成就としてのキリストの出現は、**進化の過程**の中に位置づけられる。

「キリスト論・三位一体論」論争

日本版、「自由主義(ハルナック)－新正統主義(バルト)」論争

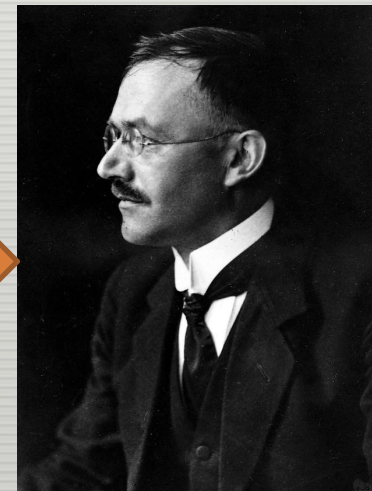
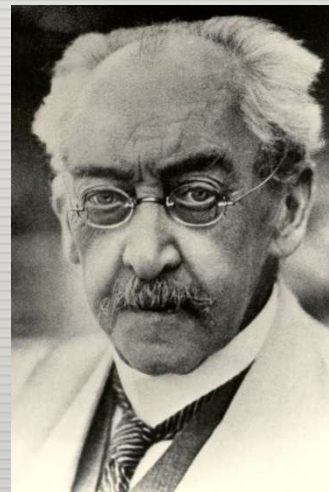
➡ 1901年9月『福音新報』に、「福音同盟会と大挙伝道」を
発表。ここから「植村・海老名キリスト論論争」が起こり、植村
は、ユニテリアン、ドイツ自由主義神学を代弁する組合教会
の海老名弾正と論争。日本基督教会教役者大会で、植村
は「教授ハルナックの神学」と題する講演を行う。



(日本、1901)



VS



(ヨーロッパ、1922)

論的への反論と対話

— 弁証(反駁)と対話の調和 —

「真正の謙遜は造化無尽蔵の真理に関し、妄りに是非を断言することを好まざるものなれど、また、妄りに真理を放擲するにあらざるなり。」(27)

➡ 有神論的自然神学の主要な論敵、「**懷疑論・不可知論・唯物論**」に対する**徹底的な反論**

「キリスト教は直接にこの誤見に反対し、大いにこれを改むるの感化を普及せり。」(177)、「吾人は工作労働を恥とすることあるべからず」(178)

➡ **近代科学**の成立に際して**キリスト教**(ピューリタンなど)が果たした**役割を指摘**し、宗教と科学とが対立しないだけでなく、さらには哲学を含めた三者が**積極的な対話**を強調。

論敵への反論と対話

— 弁証(反駁)と対話の調和 —

「近時ダーウィンの唱え出せる**進化説**は、未だ学術上確実なる事実にあらずといえども、**極めて信然なる設理に近しとす**。しこうしてその意義を正当に解釈すれば、毫も**有神論及びキリスト教の組織と相背けるものにあらず**」(181)、「吾人は神が数多の順序を踏みて、万物を造成せりと言える**進化説も、敢えて聖經に戻る事無く、また有神論に背戻するところなきを知る。**」(184)

➡ 植村にとって問題なのは、**進化論と創造論の対立ではなく、両者を対立するかのよう**に主張する**進化論者と創造論者**ということ。

明治新宗教への態度

— 弁証(反駁)と対話の調和 —

「今やキリスト教のわが国に行なわれんとするにあたり、世の哲学、或いは浅薄なる見解を立て、キリスト教は學術とすこぶる反対せるもののごとく思惟し、知識いよいよ開くれば、**宗教漸くにしてその跡を滅すと妄想するもの少なからず**と聞けり」(169-170)

- ➡ 西欧近代における**宗教批判(宗教学)**が**盲信**され、キリスト教はもちろん、日本的な宗教的伝統に対しても、**無理解と蔑視**がとくに**知識人の間に蔓延**
- ➡ この状況で、植村がキリスト教の弁証を試みた。したがって、日本の宗教的な伝統と明治の**新たな民衆的な宗教運動**を視野に入れることができなかった。

植村正久の神学的な立場 — キリスト教認識の類型 —

1. 排他主義
2. 包括主義
3. 宗教多元主義



『真理一斑』における植村の立場は、**包括主義**と評することができる。

植村正久神学の特徴

1. 福音の基本教理に充実

： キリスト中心、神であるキリストを告白し、その恩寵に終始すること。「キリストとその事業」、「海老名弾正氏の告白を紹介す」、「福音主義の信仰」に明確化。

2. 包括主義的な寛容性

： キリスト教根本主義(ファンダメンタリズム)には批判的。『宣言若しくは信条』では、「一教会の意見として宣言書を発するに当たり、或る一つの贖罪説をその項目に加えることは穏当ではない。況やこれを信条の中に加えることは大いなる間違いである」と、キリスト教根本主義の基本信条に反対。「信条制定に関する意見」では、「日本国キリスト教徒は、その信条を成るべく自由寛大にして十分に進歩の余地を与え、協和の根基を固うせざるべからず」と述べて、無教派、簡易信条主義を主張。言語靈感と聖書の無誤性も「文字崇拜」も拒否。聖書の中に科学や歴史の面から誤りがあると考えていた。

4. 植村正久の日本理解

植村の国家論

「国家は何の目的をもって成立するや。蓋し**政治上の秩序を整え、民人の自由を保護**するものなり」(「国家主義」、295 (『日本評論』40、M25/2/25))

「人類の発達、全世界の文明を期し、公法家のいわゆる宇内国を作らんと欲すればなり。国家人民は、この三層の目的を心に銘じて忘れず、着々その段階を履みて、**その最上層に達せんことを望むべきなり**」、「余輩は近代の公法学者の唱説する人類発達の大目的を推し広め、視線を霊界に向けて、**個人および国家の帰趣をキリストの教うる神国に求めんと欲す。**」(同、296)

➡ 国家はそれ自体が自己目的化されるべきものではなく、自己完結的なものではない。それは、**国民国家から世界国家**、そして**神の国**に至るさらに大きな秩序の中に位置しており、その中で**相対的な位置**を有するものとされる。

植村の「宗教と国家」の関係①

「キリスト教は何政治何国体という一定の主意を主張するものにあらざるを知るべし。キリスト教は政治上、何の主義を有せざるものと言いて可なり」、「その政治その国体種々なるを見て知るべし。」(同、38)

➡ 植村は、国家と宗教との関係の基本に**信教の自由**あるいは**政教分離**を置いており、**近代西欧**(とくに、**アングロサクソンの**)**立憲君主国家を肯定**する立場を取っている。
西欧近代をモデルにしている。



植村の「宗教と国家」の関係②

「北米合衆国のごとき宗教自由の国なりと言えども、その実はキリスト教をもって建国の基礎とするものなり。」(「キリスト教ト皇室」、40)

「さて何をもって、キリスト教は欧米諸国国家の基礎にして社会の秩序を保つとなすか。」(同、41)

➡ 植村の指摘によれば、欧米のキリスト教は社会の道徳を維持し、社会的不満を癒すことによって、国家の秩序維持に貢献している。

「将来わが国の皇室を安寧ならしめ、社会の秩序を保持する者は、或いはキリスト教の力にあらんかと信ぜらる。」(同、43)

➡ キリスト教は日本における「健全なる立憲代議の政体」(同、62)の基盤であり、天皇制が西欧的な健全な立憲君主制である限り、キリスト教は皇室を尊重することができる。

「進化」としての日本の近代化①

「日清の事変は日本を駆りて、一大奮発をなさしむるものなり。ああこれ日本が世界の日本たるの首途なり。商業の発達よりアジア伝道の拡張に至るまで、日本国民の演技は蓋し今回の戦争をもってその幕開きとするなり。これを思うときは日本のキリスト教徒は非常なる熱情、壮烈なる志望とをもって、神に祷告し、今回の事変が日本帝国の光栄を増し、将来に大関係ある履歴を作り、大いに世界の文明に与力する端を開くに至らんことを求めざるべからず。」(「世界の日本」、95)、
「形あるもの至りて、しかして後に霊に属するもの顕わるべしとはパウロの言なるのみならず、万物進化の順序にして科学の明示するところにあらずや。ゆえに維新革命の運動は必ず霊性に波及し、宗教の革新すべき時節まさに到れるなり。」(「国家主義を論ず」、300)

➡ 植村は、明治維新について、日本が世界史の大舞台に参入した出来事であり、大日本帝国の栄光の発端として評価

「進化」としての日本の近代化②

植村において理想とされる日本国家像は、**信教の自由と政教分離に基づく立憲制**

「**日本の歴史は進化の歴史なり**」(「今日の宗教論および徳育論」、314)

したがって、キリスト教は国家との同化をめざすものではないが、しかし、日本キリスト教と近代日本とは進歩としての近代化という歴史的動向の中で密接に結びついているのである。

ここに、植村が西欧的な近代化に逆行する国家主義や国粹主義に対し、明治維新の精神に基づいて反論する際の論拠を認めることができる。

急速な近代化・欧米化の問題

「この開明の風潮に、これまでの風習慣習は、いよいよ破れ、宗教はますます衰え、独り泰西の学問と政治主義のみ進入し来たらば、社会の道徳はいよいよ頹れ、人民の不平心ますます盛んなることあらん。道徳頹敗して社会の経緯たる教えなく、これに加うるに人心を満足せしむべき宗教なきときは、国家は何をもって安固なるべき。」(「キリスト教ト皇室」、43-44)

➡ 過剰な欧米モデルの導入は、それまで日本社会を支えてきた伝統的な風習や道徳を解体させ、道徳の荒廃を生じることになる。

この状況に対して、植村は道徳の復興の必要性を論じ、国家に道徳的基盤を与える宗教としてキリスト教の役割を主張する。

「教育勅語」の肯定的評価

以上の徳育荒廃という文脈において、植村は教育勅語の制定について積極的・肯定的に評価。

➡ 「目下社会の有様は、…勅語を要すること切なり。徒に制度に由り、法律に頼み、政治の助けを藉りて、…、国家百年の大計を定めんと欲する」、「**皇上の勅語は直接に道徳を輔益することなしとするも、**全国の民をして、道義廉恥のことに注目し、**風俗を矯正し、倫理を明らかならしむるの必要**を感じしむるに至りては、その功蓋し大なりと言わずんばあらざるなり。」(「日本主義」、287)

「彼の徳育に関する**勅語のごときは、**…今日の時勢を観るに、**わが国の徳育界紛々擾々乱れて麻のごとく、倫理の危機切迫せるものあるは、この勅語の出でしにても知らるるなり。**陛下が人民を憂うるの深きあに感戴せざるを得んや。」(「今日の宗教論および徳育論」、322)

教会と信徒の「社会参与」

「**貧民問題**のごとき、**廃娼問題**のごとき、海外教育のごとき、病院のごとき、**神学以外専門教育**のごとき、皆善良なる**社会的事業**なり。しかれどもその日本キリスト教徒現今の社会的事業なるべきや否やにつきては、**われらすこぶるこれを疑わざるを得ず。**」(同、373)

➡ 植村は、社会問題への関与の**意義を認めつつも**、それがキリスト教の**中心的な活動**であるという主張には**批判的**。

社会問題への関与がキリスト教の主たる使命と錯覚されているような主張に対しては明確に否定的な立場。

➡ ここから「**賀川豊彦**」とは距離が生じる。

植村は、『六合雑誌』『女学雑誌』『基督教新聞』『福音週報』『福音新報』『日本評論』『宗教及び文藝』などの**言論活動を展開**して、自らの社会参与を模索。

国粹主義化への対応①

- 愛国心の問題 -

明治中期、「欧化主義」から「国粹主義」への転換。
この新風潮への対応は？

- ➡ 「今日は欧化主義を奨励すれども明日は早打って変わりにて国粹保存を唱え、昨洋服にて往来したる者今は古代の衣冠を被り」(「中心なき国民」、78)
- ➡ 1. **国王を神格化するような国家体制や制度**は、キリスト教に反するものであることが明白であるばかりでなく、**近代の立憲主義とも相容れないものであって、絶対に認められない。**
- 2. **君主の神格化・偶像崇拝を行わない限り**、キリスト教は日本的伝統や政治体制を**尊重**することができる。したがって、国粹主義への対応は、一方で、「極端なる国家主義」「国家偶像主義」などを批判し、他方で、**キリスト教徒が真の愛国者であることを主張するという仕方**で遂行される。

国粹主義化への対応②

－ 真の愛国は？ －

「国粹の真相を明らかにし、キリスト教と日本の関係を審かにし、国勢の遷易すべき所以を究め、愛国済民の誠を推して、福音を宣伝する」(「日本伝道論」、84)

➡ 硬直した国粹主義に対して、植村は、キリスト教こそが、近代日本に相応しい進歩に基づく愛国をなし得るのであると。

「真正の愛国者…国の粹を存し、その失を改め、その天職を全うし、その宇内に独立して人類の開化進歩のために尽くすべきの本分を守るに在り。」(「今日の宗教論および徳育論」、309)

➡ キリスト教徒が真の愛国者であるのは、国家が誤った道を進むときにそれを正義の立場から批判し、国家の進路を正しい方向に引き戻すために努力するものでなければならないのである。

国粹主義化への対応③

－ 不敬事件 －

植村は、内村鑑三の不敬事件に対しても、「吾人の良心を試練するの出来事」(「不敬罪とキリスト教」、288)と評価。

➡ 「吾人は新教徒として、万王の王なるキリストの肖像にすら礼拝することを好まず」、「何故に今上陛下の勅語にのみ拝礼をなすべきや」(同、289)と批判。

「憲法にも見えず、法律にも見えず、教育令にも見えず、ただ当局者の痴愚なる、頭脳の妄想より起こりて、陛下を敬するの意を誤り、教育の精神を害」(同、290)するものであると批判。

➡ 勅語礼拝の強要が一切の法的根拠を持たないこと、立憲君主制に反し、天皇への敬意の表し方でもない。
しかし、政教分離の原則は、下からのナショナリズムの台頭に対してあまりにも無力。

植村の「武士道」理解

「ここに明治維新の世となり、かつて個々別々に養成せられたる武士道は、一天万乗の君主に忠義を尽くすに至れり。皇室は武権の跳梁に依りて、意外の美果を収め得たりと言わざるべからず。かく武士道は幾多の変遷をなし、小より大に進み、疎より密に入り、浅きより深きに達したるものなり。」
（「キリスト教の武士道」、400）

- ➡ 植村においては、このように武士道の歴史は武士階級の消滅にもかかわらず、日本文化の中で作用し続けており、実に皇室中心の日本文化の核心に及んでいる、と解されている。植村は、こうして発展してきた武士道を日本固有の高尚な精神性と賞賛する。
- ➡ 「武士道＝旧約」というその議論に賛同している。旧約聖書の伝統が新約聖書のキリスト教へと接続したように、日本固有の優れた精神的宗教性である武士道こそが、キリスト教が日本に土着化するための接点を構成するという見解。

植村の「天皇制」理解

「天皇陛下大旗」、「陛下御治世の下にわが日本帝国は前代未聞の大改革を行ない」、「アジアの旧天地に空前の偉業を成就せんとす。陛下英明の徳臣民を鼓舞し」、「陛下の武威は日清間の戦争に由りて朝鮮、支那の海陸に輝きぬ。陛下の御治世において憲法は発布せられ、国会は創設せられ、教育は著しく進み、その他法度典章の改善せしものすこぶる多し。」(「天長節」、101)

➡ 日本の近代化において、天皇が決定的な役割を果たし、日本国民がその恩恵を被っている。明治憲法の発布(特に信教の自由)は、キリスト教徒にとっても天皇に感謝すべき事柄。

➡ 明治憲法に現れた立憲君主的天皇を前提とする。
大正期以後の天皇絶対化への進路とキリスト教。
: 土肥昭夫(批判的)、五十嵐喜和(弁解)、雨宮栄一(中間)

5. 植村正久の限界と課題

植村と明治学院 ①

1877年(明治10年)、井深梶之助らと共に**東京一致神学校の一期生**になる。卒業後に、東京府下谷諫堀町で開拓伝道をはじめ1887年に一番町教会堂(後の富士見町教会)を設立。生活費を稼ぐために翻訳の仕事をしたり、**明治学院で神学を教えたりしながら牧会伝道**に務める。

1886年(明治19年)、東京一致神学校が「邦語神学部」、「普通学部」、「専門学部」を有する「明治学院」となる。この時、**「明治学院」という新名称を植村正久が提案**。

➡ 「学校といえば、明治学院最初の理事会において … その名称を如何にすべきかという問題に直面して、種々の提案が出たが、いずれも賛成者が少なく、最後に明治学院がよかろうという提案を為したのは、即ち植村正久君その人であって、それが満場一致賛成を以って採用され、現在に至った次第である。」(『植村正久と其の時代』第3巻、467。)

植村と明治学院 ②

-東京神学社の設立-

明治30年前後から、植村には日本の教会の自立、独立の問題があった。「ミッションの禄を食むことの矛盾」を絶感。

1903年藤村操の自殺に対して「生きるとも何の甲斐あらんや」を『福音新報』に発表する。第15回夏期学校で『ブラウニングの宗教』と題して講演を行う。

1903年に明治学院の保守派の南長老宣教師(サミュエル・フルトンら)がクラークの『基督教神学概論』の使用に反対した。このためフルトンと袂を分かつことになり、植村は明治学院を辞職する。そして、甲府伝道を開始する。

➡ 「植村氏に辞任再考を説得する可能性が見られなかったので、理事会は遺憾ながらこれを承認した。しかし、(…)講師として本学院との関係を継続することを同氏に要望した。(…)植村氏の本学院の状態に関する意見やそれを実現する方法につき特別に諮問することとした。」(『明治学院百年史』、p.225.)

植村と明治学院 ③

-辞任の時、明学神学部に残した提言-

「一．明治学院神学部と日本基督教会との間に、いっそう緊密な関係を持つこと。二．学生補助の資金は、ミッションによらずして、学校によって管理されること。候補者の資格審査は学校の権限たること。三．日本基督教会の信仰箇条こそ、教育の基準であり、教授は他の信仰箇条を固執せず、また日本基督教会の信仰箇条に反しない限り教授の教育に制約を加えるべきでないこと。四．教授会は有能な新教授の採用によって強化されるべきこと。五．別科は改善するべきこと。六．理事会は、如何なる場合にも教員の任命に関しては、主導権を取ること。」
（『明治学院百年史』p.225。）

➡ 1904年(明治37年) **渡辺荘**らの資金的協力により、海外ミッションから完全に独立した、東京神学社神学専門学校を設立した。自給独立案を大会に提出するが否決される。

植村と明治学院 ④

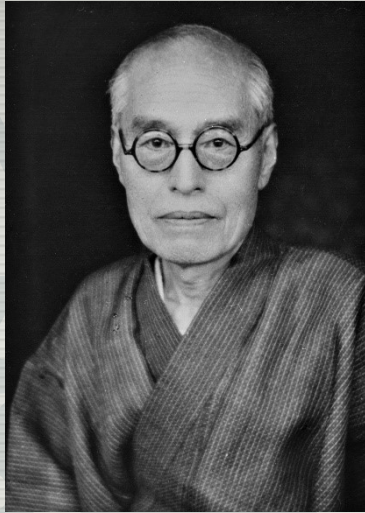
－ 東京神学社の設立理念 －

「**信仰の独立とともに思想の独立を図る**ことも必要であるとの意見より、**独立の神学校を起こす**ことにした。しかし、一銭の資金も無いので、先生宅で祈祷会を開き席上で献金を募った。(…) 東京神学社は教師植村正久等の設立したるものにして、其の開社式は明治37年11月3日…最初の入学生は12名なりしが。」(山本秀煌、『日本基督教史』、1929、p.381.)

「**日本は独立の基督教を要す。独立の基督教は独立の教会を要す。**日本の基督教会は基督教と其の霊とに頼るの外、少しも他の待つ所なく、(…) **日本の基督教が外国宣教師の力を借りず、その資力に仰ぐところなく、純粹なる自己の経営に依りて神学思想を修め、伝道の重任を帯ぶべき人物を養成するの学校を有せずして、今日に至れば、すでに久しくその時機を失したるの感なくんばならず。教会の独立を企図する者は、神学研究に於いてもこれと同じ必要あるを忘るべからず。**」(「東京神学社」(『植村正久著作集』第6巻、176-177。)、『福音新報』10月27日)

植村と明治学院 ⑤

— 東京神学社・京大・玉川大学の学脈 —



宗教哲学者、波多野精一(1877－1950)。1901年、植村から受洗したキリスト者。1907年(明治40年)東京帝国大学文科大学講師を嘱託され、「原始基督教」を講義し、1908年(明治41年)『基督教の起源』を刊行する。1917年京都帝国大学に赴任してからは西田幾多郎とならぶ京都学派の立役者になる。波多野の京大での受講者で波多野から強い影響を受けたとされる人物に三木清がいる。玉川大学第2代学長。(玉川大学の設立者である小原國芳は、波多野の京大の弟子)



植村正久の助力者、渡辺荘(1859－1929)
資産家、富士見町教会の会員であり、東京神学社の名誉理事である。一番町教会に出席するようになり、植村正久の導きで回心し、植村より1905年(明治38年)11月5日に洗礼を受ける。1909年長女の貞子が石原謙と結婚する。東京神学社の土地、校舎、寄宿舍の建設資金などの渡辺の資材を投じた。また、1918年の京都大学の波多野精一のキリスト教講座の創設の際にも資財を投じた。自宅の一部に千鳥ヶ淵神学研究所を設置。後に、東京神学社の名誉理事になる。

知識人中心の日本

民衆・庶民中心の朝鮮



- 武士・知識人が伝えた福音(日本)

- 商人・平民が伝えた福音(朝鮮)



漢文に基づいた日本の聖書

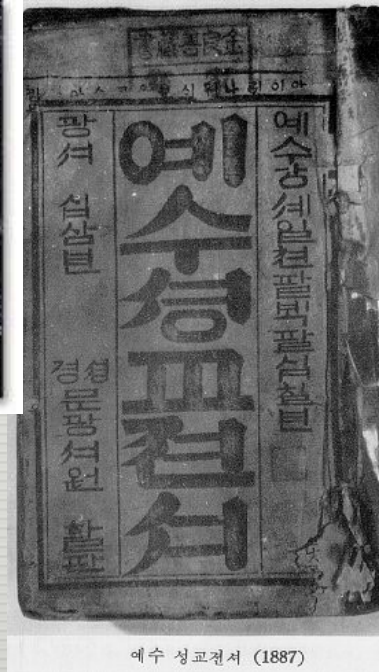
ハンゲル中心の朝鮮の聖書

■ 武士・知識人の国文聖書翻訳(日本)

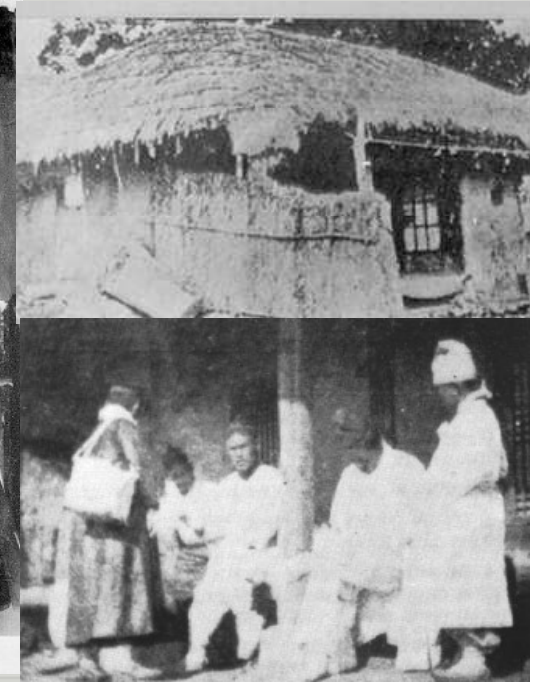
■ 商人・無知者のハンゲル聖書翻訳(朝鮮)



「松山は、顕著な漢学者で(略)当地の一、二名の政府の高級官吏を除くと、彼以上に中国と日本の文学に精通している人は、この地方にはいないのではないかと思います。(略)彼は無学な人と話すのには慣れていないようですが、間もなくこの困難も克服するだろうと思います」(グリーンの宣教報告書)



예수 성경전서 (1887)



(上)最初のソレ教会、1884年

(下)勸書人の伝道、1890年

植村の「大地性・民衆性」の欠乏

「植村の近代国家理解は、アングロサクソン・モデルによる国家論（政教分離、立憲政治）に基づくものであったが、…立憲君主的天皇への敬愛と信頼という点で、…上から近代化を推進しつつあった明治日本に適用する際の限界性の問題である。」(芦名定道)

「植村の視線が、言論世界における知識人あるいは都市中産階層へむけられていた…都市の遙か周辺で起こりつつあった民衆宗教のうねりは、植村の視野には入っていなかった。」(芦名定道)

➡ 「植村の民衆の宗教性に対する盲点は、日本キリスト教の盲点だったのである。」(芦名定道)

植村の「エリート主義」と賀川の民衆性

「**我輩の教会に車夫、職工の類はいらない**」と言って下層階級、ブルーカラー、肉体労働者層を排除。(季刊『at』15号、「特集 賀川豊彦 その現代的可能性を求めて」太田出版、2009年4月。)

植村正久の師であるサミュエル・ロビンス・ブラウン宣教師も「伝道は急務である。しかし**無学な者が伝道するのは害がある**」との持論を持っていた。

➡ 上流階級、中流階級、ホワイトカラー層中心の教会を形成した植村正久

賀川豊彦の批判

「粕壁には大きな教会を建て礼拝してみたものであるが、今では信者三人位しかない。そして松村介石氏や海老名弾正氏などは天ノ御中主命とキリスト教のエホパとは同じであると一去って、キリスト教を神道化しなければならないと云ひ出した。そして海老名氏は世界漫遊に行く迄国粹主義であった。その影響が植村正久氏にうつりその為に明治学院が分裂したり、宣教師を排斥した。そしてキリスト教はインターナショナルだといふことを忘れてしまったことがあった。」

(賀川豊彦、『尽きざる油壺』 新生社、1931年、p.60.;『全集』2:300-1)



宣教師と葛藤し、追放した熊本バンドへの 松山高吉の批判

「適ま翁(松山)に取つては容易ならない問題が突発した。…横井時雄、金森通倫、其の他の諸氏が**新神学を唱道**して(…)時の同志社総長小崎弘道氏の下にあつて、**教会の自由独立問題勃興**し、小崎、横井、海老名、宮川諸氏は何れも之を強調して**一時外国宣教師は同志社から退去するの余儀なきに至つた**。翁の眼には**此れは日本固有の道徳を破壊する不埒千萬の行動と映つた**。しそう上、實際上、其の**恩師にして先進たり、長老たる宣教師に弓を引くには、翁の眼には忘恩不徳の所為であつた**。(…)翁は遂に久しく交はつた組合教会の同人と相容れず、去つて平安女学院の教授となり、次いで其の籍をも聖公会に移すこととなつた。」(「松山高吉翁の逝去」、『福音新報』、第41巻第2030号、1935年1月10日、p.23.)



植村から学ぶ、継承すべきキリスト教的 「インターナショナリズム」は何か？

- (1) 欧米人(宣教師など)による教育・研究
- (2) 日本人のみによる教育・研究
- (3) 欧米人以外の外国人も含む教育・研究



< 参考資料 >

雨宮栄一、『戦う植村正久』、新教出版社、2008.

雨宮栄一、『牧師植村正久』、新教出版社、2009.

芦名定道、「植村正久とキリスト教弁証論の課題」、『アジア・キリスト教・多元性』第5号、現代キリスト教思想研究会、2007年3月、1-22頁。

芦名定道、「植村正久の日本論(1)―近代日本とキリスト教―」、『アジア・キリスト教・多元性』第6号、現代キリスト教思想研究会、2008年3月、1-24頁。

芦名定道、「植村正久の日本論(2)―近代日本とキリスト教―」、『アジア・キリスト教・多元性』第7号、現代キリスト教思想研究会、2009年3月、1-20頁。

洪伊杓、「松山高吉と植村正久の関係形勢過程とその意味」、『キリスト教史学』第69集、キリスト教史学会、2015年7月、178-195. など。